

# 不安もあったけど チャンスだと思った

今年2月、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の乗客、乗務員を受け入れた藤田医科大学岡崎医療センター。現場の様子を伊藤隼也が取材した。



トリアージの準備をする看護師職員と滞在者からのお礼の手紙

「受け入れまでたった3日  
深夜に行われたトリアージ」

**伊藤** 今日は、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の乗客・乗務員の対応にあたられた看護師さんに集まっていたきました。2月19日に陽性者とその家族である濃厚接触者を受け入れてから約1カ月、今まで経験したことのない緊張した状況下で、たいへんだったと思います。

**小島** ありがとうございます。

**伊藤** 最終的に、ここでは何人の乗客・乗務員を受け入れたのでしょうか。  
**小島** 最初は200人と聞いていたのですが、結果的には128人でした。それに対して看護師は、最初は管理者や感染管理認定看護師などを中心に7人で対応していましたが、やは

**小島** はい。陽性者が使うレッドゾーンのエレベーターには赤い札を付け、使用を制限しました。病棟も陽性者と濃厚接触者と分けました。陽性者は病棟内の移動は自由でしたが、皆さん廊下で歩いたり、体を動かしたりしていましたが、濃厚接触者は感染リスクを避けるため部屋から出たはいけなかったもので、そちらのほうが不自由だったと思います。  
**伊藤** 外国人がほとんどですか？  
**志摩** そうですね。中国やロシア、カナダ国籍などが多く、日本人は少なかったです。外国人の方の名前が分かりにくいこともあったので、間違えないようリストバンドに印字した名前と部屋番号を貼って、手首に付けてもらっていました。

「岡崎医療センターの歴史は  
クルーズ船から始まる——」

**伊藤** 厚生労働省からクルーズ船の乗客・乗務員の受け入れ要請があったのが、日曜日だと聞いています。そこから受け入れ体制を整えて、地域への説明会を開いて、受け入れたのが水曜日の未明。皆さんが現場に入ることを知ったのは、いつ頃でしたか。



名前と部屋番号が書かれたリストバンド

りそれでは足りなくて。応援を要請して、最終的に16人で対応しました。志摩は最初から、高木と白井は翌日からチームに加わりました。

**伊藤** 基本的に、こちらが受け入れたのは無症状の方ですよ。

**志摩** そうです。到着時に医師と看護師によるメディカルチェックを行いました。酸素飽和度が低下していたり、咳込んでいたりした方については病棟には入れず、近隣の医療機関に搬送しました。

**伊藤** トリアージですね。到着後はどう病棟に誘導したのでしょうか。

**小島** まず、正面玄関にバスが到着したら全員分の荷物を下ろしました。その後、濃厚接触者には自分の荷物を持って、待合に入ってもらいました。この方たちのメディカルチェックが終わったら、少人数ごとに病棟に入ってもらい、次は陽性者を待合に入れて同様にトリアージを行います……という感じで進めました。  
**伊藤** 病棟も分け、エレベーターもゾーニングしたんですね。

**小島** 火曜日の昼頃です。

**志摩** 看護部長（現・藤田医科大学病院統括看護部長）に呼ばれたので、声がかかるだろうとは思いました。もともと、新設開院後に岡崎医療センターに行く予定でしたから。

**伊藤** 予想していたとはいえず、打診されたときは、ためらいはなかったですか？

**志摩** 不安はありました。でも、これはチャンスだと。めったにできない経験ができるという気持ちの方が、むしろ強かったです。

**伊藤** 素晴らしい。当時はまだCOVID-19についてほとんどわかっていなかった。にもかかわらず新しい感染症に挑む気持ちがあったんですね。高木さんはいかがですか？

**高木** いろいろなことが急に決まって、不安を感じる時間さえなかったです。ただ、家族に感染させてはいけなないと、そこは気を遣いました。

**伊藤** 家族は反対しなかった？

**高木** しなかったです。息子は「あ、行くんだ」との反応でした。

**白井** 私は正直なところ、怖いって思っていました。でも、先発隊が行っていましたし、「行かなきゃいけない」という覚悟はありました。

**伊藤** 現場に入ってから、怖いという感覚はありましたか？

## PROFILE

看護長

白井 美紀さん



PROFILE

1992年、八事看護専門学校卒業後、藤田医科大学病院へ就職。同大地域包括ケア中核センターでの訪問看護を経て、同大病院の救命救急センターで生命危機状態に陥った患者の看護および救急医療に従事する看護師の育成に携わる。2020年4月から岡崎医療センターICU、重症患者の看護や病棟管理に従事。2020年から現職。

看護部長

小島 菜保子さん



PROFILE

1989年、聖隷学園浜松衛生短期大学卒業後、藤田医科大学病院へ就職。2013年、同大地域包括ケア中核センター。2018年から同大病院の看護副部長として看護管理業務に従事。2020年4月に開院した藤田医科大学岡崎医療センターの立ち上げに携わり、クルーズ船受入れ時に看護部の指揮を執る。2020年から現職。

看護長

志摩 千草さん



PROFILE

1996年、藤田医科大学看護専門学校卒業後、同大病院へ就職。外科系、内科系問わず幅広い看護経験を有する。2020年4月、岡崎医療センターに配置。現在は内科病棟の管理に従事する。開院前のクルーズ船の受入れ時には第一陣の到着から携っており、当時の経験を基に現在も病棟への指導や職員管理を行う。

看護長

高木 里枝さん



PROFILE

2000年、愛知県立桃陵高等学校専攻科卒業後、藤田医科大学病院へ就職。循環器内科や血液内科、化学療法などでさまざまな領域を経験し、幅広い知識を有する。2011年、輸血看護師認定資格取得。2020年4月、岡崎医療センターに配置。内科系の看護だけでなく、看護師の教育や育成にも携わる。



1階の待合が受け入れ待機室(1階待機室の様子)



6階待機室の受付係らと医師の待機室の様子



待機室に到着した乗客に手紙を渡す様子

**白井** 感染症科の医師が常駐していたので、疑問に思うことや不安について、相談することができました。例えば、自宅に帰ったときの感染リスクはどうか。医師はこちらの質問に一つひとつ答えてくれました。それにしても、皆さん打診を断らなかつたというのがすごいです。

**高木** それは動機付けが大きかったからだと思います。

**伊藤** 動機付けですか？

**高木** 看護部長から「岡崎医療センターの歴史はクルーズ船から始まる。だから参加してほしい」と。そう言われたら、嫌とは言えません。

**伊藤** 小島さんはどんな思いでその言葉を受け止めたのでしょうか。

**小島** 理事長から受け入れの話を聞いたとき、受け入れ先がなかったか

ら藤田に来るのではないかと感じました。それと同時に、「ここで受けなかつたら、この人たちはどうなるんだろう」とも。ですから「なんで私たちが？」などと聞くスタッフは一人もいませんでしたし、みんな使命感を持って対応してくれました。

### 「朝は検温と酸素飽和度の測定 会話は P O C K E T A L K」

**伊藤** 皆さんを初めとする多くの人の覚悟があつて、岡崎医療センターでは受け入れが始まった。看護師チームはあの日、乗客や乗務員に対し、どんな業務をされたのでしょうか。

**高木** 朝は検温と酸素飽和度を測り、問診票を確認していました。あとは、お弁当を渡して、回収するとか。

## 陽性者に寄り添えば感染リスクが高まる COVID-19 のような感染症の現場において 両者のバランスを取ることはむずかしい でもそれは看護師だからできたことだと思う

**小島** 報道の関係者が看護師に「不安ですよ」と。あなたも誘導尋問のようなことをされたときもありました。とにかく怖い現場ということを引き出したかったようです。

**伊藤** そんなことも、COVID-19 にまつわる報道に対しては、僕も思うところがありますが、まさにメディアの質が問われるところです。

**伊藤** それから今回、看護師さんが白衣を着ないで対応にあつたという事実は、そこにはどんな意図があつたのでしょうか。

**伊藤** 「私たちは看護師である」とい

また、タオルや歯ブラシなど、不足しているものはないか聞いて、必要に応じて補充していました。

**伊藤** 128人に対して16人の看護師さんが交代で行っていたわけですよ。しかも、感染予防を徹底しながら、陽性者では常に発症を警戒し、濃厚接触者では陽性になっていないか、PCR検査の結果を常に気にしなければならぬ。それはかなりたいへんなことだったと思います。

**高木** 確かに、濃厚接触者の方からは、「いつ検査を受けられるのか」「いつ結果が分かるのか」とか聞かれました。結果的に濃厚接触者から陽性者が出ずにすんでよかったです。

**伊藤** 外国の乗客・乗務員とのコミュニケーションは、どうやって図っていたのでしょうか。

**高木** 日本語が話せない方が多かつ

たので、i-PeakやPOCKETALKでやりとりをしていました。

**伊藤** 支援物資は足りていましたか？

**白井** それは十分に。今、ナースステーションがあるところが支援物資の置き場でしたが、そこが一杯になりました。地域の方からの支援もあつて、本当に感謝しかありません。

**伊藤** あの日メディアが報じていたのは、緊張感が漂ってヒリヒリした現場でしたが、実際はどうだったのでしょうか。

**白井** 世間が思っているのとは違つて感じましたし、騒ぎ立て過ぎなんじゃないかとも。ここにいる乗客、乗務員の方はみんな普通でしたし、私たちがも何の問題もなく会話をしていました。

**伊藤** 報じられている内容と、かなり差がありますね。

までしないと伝わらない。

**白井** 部長の気持ちは痛いほどわかりました。でもその一方で、乗客・乗務員の人たちに最大限のケアをした気持ちはありました。ここに来たのは彼らにとって不本意かもしれないけれど、せつかく岡崎まで来たのだから、最後は満足して帰ってもらいたい。ずっとそう思っていました。

**伊藤** それは白井さんだけでなく、多くの看護師が抱いた感情でしょう。でも、見方を変えたら、看護師という職業だったからこそ両立できたといえると思う。先ほど、退所された方の手紙を拝見しましたが、皆さん「ここにきてよかった」「ありがとう」という言葉を残していますよね。

**志原** 紙コップにお菓子と「THANK YOU」という手紙を詰めて渡してくださったことも、皆さんの「ありがとう」は励みになりました。

クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」無症状陽性者とその同行者の受け入れの流れ

2月16日	厚生労働省から受け入れを打診
2月17日	対策本部を設置
2月18日	地域住民向け説明会を開催
2月19日	2時19分 第1陣32人到着 22時30分 第2陣25人到着
2月20日	23時30分 第3陣19人到着
2月22日	2人陽性診断
2月24日	1人陽性診断
2月25日	19時18分 第4陣20人到着 1人陽性診断
2月26日	19時55分 第5陣12人到着 (受け入れ終了) 2名陽性診断
2月27日	臨時陽性診断
3月8日	5人本院に移送
3月9日	25人陽性診断(退所終了)
3月11日	病室の消毒作業を開始
4月7日	閉院

病院のホームページから



病室内に待機する乗客乗務員に消毒液を運ぶ看護師



感染病室の観音から同様のカラーリング

クルーズ船の乗客・乗務員がバスに乗り  
横浜から9時間もかけて岡崎の地へ  
なぜもっと近い施設が受け入れなかったのか  
この「もやもや」はずっと残るだろう

### 「経験を開院後の看護に活かす 看護の原点に戻る機会にも」

**伊藤** 返す返すも、当時、岡崎医療セ  
ンターは開院前で、患者さんがいな



深夜、自衛隊の先導でバス2台が  
岡崎医療センターに到着

かったというのは大きかった。

**小島** そう思います。患者さんがい  
なかったから、乗客、乗務員の方への  
対応に集中できました。

**伊藤** 地域の協力も大きかった。

**小島** それは感謝しかありません。  
それから事務の方にもとても助けら  
れました。心ない電話もあったと思  
うので、でも、それらをすべて対応し  
てくれました。

**志摩** そういう電話があったことな  
ど、まったく知りませんでした。

**伊藤** 志摩さんは「めったにできな  
い経験」と言っていました。この経  
験でなにか得たことはありますか？

**志摩** なんとと言っても感染に対する  
知識がさらに深まったことが大き  
い。あとは、職種を超えて同じ時期に  
同じ思いを共有することができた。

開院前に他職種連携が経験できたの  
も、今後に生かせると思っています。  
何より団結力が高まりました。

**白井** 今まで「事務の人」と呼んでい  
たところが、「●●さん」と名前と呼

べるようになりました。今までより  
具体的な依頼ができるようになるな  
ど、コミュニケーションがとりやす  
くなりました。

**伊藤** 小島さんはクルーズ船の受け  
入れで看護部の指揮を執りました。

この経験を今後どう活かしますか？

**小島** あときは聴診器を持たずに  
対応していましたが、それでもでき  
ることは十分にありました。そう考  
えると、病棟で今まで行っていた  
ルーティンが本場に必要なのか、も  
う一回見直さなければならぬと感  
じました。世の中はIT化に向かっ  
ていますが、患者さんの顔色を見る、  
話を聞くという、看護の原点に返っ  
て考える機会を与えてもらいました。

**伊藤** 確かにそうですね。新型コロナ  
ナによる社会への影響はまだ続い  
ていますが、皆さんに会って、正しく  
恐れつつ、科学的な対策を行うこと  
が、いかに重要かがわかりました。今  
回の大学の大英断によって、外部か  
らは知り得ない苦悩や努力があった  
と思います。ですが、この経験は、将  
来もしかしたら発生するかもしれな  
い、新たな感染症と闘うための知識  
になったのではないのでしょうか。今  
回の取材で、「看護師さんは常に最前  
線にいる」ということを再確認しま  
した。ありがとうございました。



### 伊藤 隼也

(いとう しゅんや)

医療ジャーナリスト・  
写真家  
医療情報研究所代表

### profile

患者中心の医療を実現するため医療  
ジャーナリストとしてテレビや雑誌  
などのメディアで活動中  
ホームページ shunya-ito.tv

取材・撮影・伊藤隼也  
構成・山内リカ  
デザイン・田中沙希子  
(左ページも)

## interview

スペシャルインタビュー

藤田学園理事長インタビュー

# 看護師さんには感謝しています

「火中の栗を拾う」ということわざがある。岡崎医療センターはクルーズ船の乗客、乗務員をなぜ受け入れたのか。藤田学園理事長で医師の星長清隆さんに聞いた。

— 2月16日の日曜日、厚生労働省か  
ら電話で要請がありました。

「開口一番、話を聞いてくれないか、  
と。『クルーズ船の、無症状だけれど  
感染している人を受け入れてくれな  
いか』という内容でした。すぐに、才  
藤栄一学長と湯澤由紀夫病院長に連  
絡したら、『受けよう』という話に  
なり、急ぎよ、ベッドのシーツ、カー  
テン、食事の手配をしました」

— 受け入れを即断しました。  
「困っている人がいたからです。日曜  
に厚生省が電話をかけてくるという  
ことは、よほど助けてほしかったの



インタビューに答える星長さん

でしょう。当院の理念は「我ら、弱き  
人々への無限の同情心も、片時も  
自己に驕ることなく医を行わん。」で  
す。学生にも日ごろから「弱い人の立  
場に立て。常に患者中心主義で、自分  
たちが最後であれ」と教えてきまし  
た。そう言い続けた人間は、この依頼  
を断つてはいけません」

— 受け入れによって、二次感染が起  
こるかもしれません。

「それは頭にありました。でも、我々  
は医療者です。日常の業務のなかで  
も感染するかもしれないという覚悟  
を持ちながら仕事をしています。も  
ちろん、スタッフが感染しないよう、  
サポートはするつもりでした。

私がいюのも何ですが、藤田はみん  
な仲が良いんですよ。チームワーク  
がある。診療科、職種に垣根がな  
く、困ったときは助け合う。ですか  
ら、岡崎医療センターに行ってくれ  
たスタッフに対しては、本院(藤田医

科大学病院)から全面的に支援しま  
した。金銭的な部分も含めてです」

— 理事長も、スーパーで支援助物を  
購入して持っていたのですよね。

「くだものなどを差し入れました。支  
援物資といえば、商工会議所の人た  
ちが必要な物資を届けてくれるな  
ど、地域の協力が有り難かったです。  
岡崎市もとても協力的で、総力を挙  
げて応援してくれました。そうそう、  
地域にお住まいの方からの支援もあ  
りました。お金が入った封筒が正面  
玄関のドアのすき間に挟まっていて  
ね、『市民として誇りに思います』と  
いうメッセージが書いてあって。心  
を打たれました」

— 結果的に二次感染がなく順調に  
送り出すことができました。

「順調かどうかはわかりませ  
ん。これは感染症なんだからスタッ  
フが感染することもあったと思う。  
ただ、そうなくても爾々とやるだけ



受け入れの際はスタッフの  
邪魔にならないよう2階から見守った

です。当院は本院でも感染者を診て  
いて、今もECMOを受けている方  
がいます※。それでも、二次的な感染  
者が一人も出ていません。感染症の  
医師を中心に、きっちり対策がとれ  
ているからだと思っています」

— 今回の受け入れでは、看護師の果  
たす役目は大きかったと思います。

「看護師さんはすごい。話は違うけれ  
ど、僕がまだ若い頃は臨床研修がな  
かったので、いきなり現場に出なけ  
ればならなくてね。現場で大切なこ  
とはすべてベテランの看護師さんに  
教わりました。今の僕があるのは看  
護師さんのおかげだと思っています。  
今回、最終的に岡崎から本院に何  
人か転院されたけれど、それも看護  
師さんがずっと付き添っていた。『こ  
苦労さん!』って言いたいですね」